Report

調査報告

蓬左文庫の典籍の調査
―二〇一七・二〇一八年度の活動―

名古屋市立大学大学院人間文化研究科　吉田　一彦

蓬左文庫

蓬左文庫は、尾張徳川家が保持してきた書物、文書、資料などを今日に伝える文庫である。初代尾張藩主の徳川義直（一六〇〇～一六五〇）は書物、学問を好み、父の徳川家康（一五四二～一六一六）から多くの書物を相続した。これは「駿河御譲本」と呼ばれている。さらに、義直自身も多くの書物を収集した。蓬左文庫の中核となるのは、これら義直が所持した書物であるが、尾張徳川家では次代以降も収集が継続され、さらに近代以降にも種々の書物、文書、資料が集積された。現在、和書、漢籍、洋書、古文書、古地図など、蔵書は約十一万冊に及ぶ。

これらは、尾張徳川家から財団法人尾張徳川黎明会（のち徳川黎明会）に継承され、昭和二五年（一九五〇）には名古屋市に移管された。蓬左文庫は、昭和五三年（一九七八）からは名古屋市博物館の分館になっている。文庫の蔵書類は一般公開されている。

蓬左文庫典籍研究会の発足

二〇一六年、私は、蓬左文庫長の鳥居和之氏から蓬左文庫所蔵書物の調査、活用について相談を受けた。蓬左文庫には目録とそれに基づく蔵書検索システムがあり、そこに蔵書一点一点の情報が記載されているが、その情報量は必ずしも十分なものではなく、どのような書物であるのか未詳の部分も多い。そこで、一点一点を再調査して情報量を増加させ、もっと活用しやすい形で広く発信したいと考えているという内容だった。たしかに同文庫所蔵の『続日本紀』や『侍中群要』、あるいは『源氏物語（河内本）』などは学界に広く知られており、重要文化財に指定されているが、詳細未詳であるものも少なくない。そこで、鳥居文庫長とあれこれと意見交換し、私が専攻する日本古代史に関する典籍を手始めに、チームを組んで詳細調査をさせていただきたいとお返事した。

二、三の準備を経て、二〇一七年三月、研究会が誕生した。構成員は、吉田一彦（名古屋市立大学）、丸山裕美子（愛知県立大学）、廣瀬憲雄（愛知大学）、浅岡悦子（名古屋市立大学大学院学生、のち同研究員）、手嶋大侑（名古屋市立大学大学院学生）と、蓬左文庫の鳥居和之、木村慎平で、やや遅れて芝田早希（名古屋大学大学院学生）、西山亮介（名古屋市立大学大学院入学予定）、松薗斉（愛知学院大学）が加わって現在に至っている。研究会の名称は「蓬左文庫典籍研究会」とした。

研究会では、蓬左文庫所蔵典籍のうち、まず日本古代史に関わるもの約一二〇点をリストアップして、原本調査を行なうこととした。そして、そこで得られた情報をデータベースに反映して広く公開するとともに、将来は画像の公開も念頭に置くこととした。

研究会では、その後、平成二九年度の大幸財団の「人文・社会科学系学術助成」に、研究課題「蓬左文庫所蔵典籍の調査および史料研究―古代を中心に―」（研究代表者　吉田一彦、研究期間二〇一七年一〇月～二〇一九年三月）と題して申請した

ところ、幸いにも採択された。現在、調査、研究は大幸財団の助成を受けて行なっている。

所蔵典籍の調査

蓬左文庫典籍研究会は、二〇一七年四月から蓬左文庫を会場に、一箇月に一回程度の頻度で原本調査を行なっている。これまで、『延暦神宮儀式帳』（二冊）、『古事記』（三冊、真福寺本の書写本）、『古事記』（三冊、塙保己一校本）、『古事記裏書』（一冊）、『日本書紀（附訓）』（三冊）、『日本書紀』（一五冊）、『日本書紀』（『張州雑志』のうち）、『日本書紀　神代巻』（二冊、駿河御譲本）、『日本書紀　神代巻』（二冊）、『日本書紀　神代巻』（二冊）、『釈日本紀』（八冊）などの調査を進めてきた。

二〇一八年二月の調査からは、分量の多い『日次記』（二三〇冊）の調査を開始した。これは、平安時代中期以降の記録類を年代順に編纂したもので、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸の十干にて分類され、各干ごとに木の箱に収められた美麗な冊子本である。それぞれに目録一冊（計十冊）が附されている。内容は甲一が『九暦』、甲二が『後三条天皇即位記』と始まり、甲十三から丙四が『台記』、丙五から辛十六までが『玉葉』というように続いていき、最後の癸廿以降は各種の部類記になっている。

写真１　蓬左文庫本『日次記』

『日次記』は、京都の二条家が伝来の貴重な記録類を編纂したものであるが、徳川家康がそれを所望して写本を作り、以後それが江戸城に伝えられるところとなった。蓬左文庫本『日次記』はそれのさらなる写本で、寛永一〇年（一六三三）に書写されたものである。ところが、江戸城の写本（富士見亭文庫、のち紅葉山文庫）は、残念ながら、明治六年（一八七三）の宮中の火災で目録十冊を残して焼失してしまった。したがって、蓬左文庫のものは、現存する『日次記』の大変貴重な写本ということになる。『日次記』は全二三〇冊と大変大部なもので、調査に多大の時間を要し、私たちは、現在、他機関所蔵の『日次記』との比較検討を行なっている。

他機関に所蔵される関係典籍の調査

蓬左文庫所蔵典籍の性格を明確化するには、関係する写本との比較検討が不可欠の作業になる。私たちは、関係写本を所蔵する他機関に赴き、見学、調査を実施してきた。二〇一七年後期～二〇一八年前期に、私たちはまず天理参考館（道果本『古事記』、乾元本『日本書紀』、『明月記』など）、東洋文庫（岩崎文庫本『日次記』）の見学、調査を行なった。次いで二〇一八年八月七日～九日には、東京の集中調査を行ない、内閣文庫（『日次記』、部類記類など）、國學院大學（三嶋本『日本書紀』）、国立国会図書館（『日次記』など）を訪れ、続いて九月一九日に東京国立博物館（玉屋本『日本書紀』、『寛治二年記』）を訪れて関係史料の実見調査を行なった。

八月の東京調査は台風に遭遇して天候には恵まれなかったが、得るところはなはだ大きく、甲乙丙丁の十干分類の『日次記』ではない、鶏・狗・猪・羊・牛・馬・人・穀で分類する、東方朔『占書』に基づく分類の『日

次記』に出逢うことができ、一同大変驚いた。また、三嶋本『日本書紀』や玉屋本『日本書紀』と蓬左文庫本『日本書紀（附訓）』との関係について知見を深めることができたのも大きな収穫だった。

合同研究会、講演会、シンポジウム

私たちは、二〇一七年十一月五日、蓬左文庫典籍研究会と名古屋古代史研究会の合同研究会を開催した（会場：蓬左文庫）。この日は、最初に『続日本紀』巻十五と『宇多紀略』の熟覧会を行ない、種々意見交換の後、研究発表を三本行なった。名古屋古代史研究会は、東海地域の古代史研究者が広く参集する会で、私も長く会員であり、また私の恩師彌永貞三先生（名古屋大学助教授、東京大学史料編纂所教授・所長、上智大学教授を歴任）ともゆかりの深い研究会である。ここで名古屋古代史研究会と合同研究会を開催して広く御意見を頂戴できたのは大きな収穫だった。

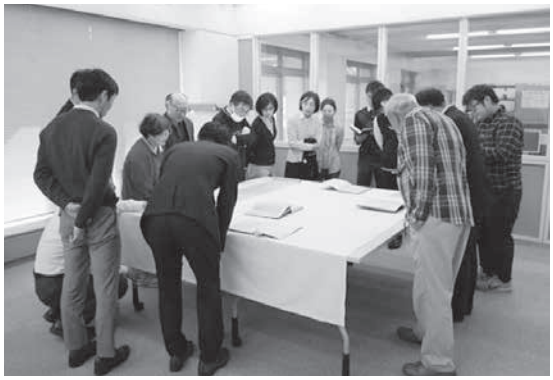

写真２　名古屋古代史研究会と合同研究会

続いて、二〇一八年六月三〇日に、田島公氏（東京大学史料編纂所教授）を講師にお招きして、公開講演会「文庫研究の世界―禁裏・公家文庫の目録学研究と蓬左文庫―」を実施した（会場：ＪＰタワー名古屋五階　名古屋市立大学サテライト会議室）。この講演会は、蓬左文庫典籍研究会の主催、名古屋市蓬左文庫の共催、名古屋市立大学人間文化研究所の後援で開催された。田島氏は、日本の天皇家や貴族の家に伝わる典籍・記録・文書などを丁寧に調査してそれらを体系化し、日本の「目録学」「古典学」を構築しようという壮大な研究課題に取り組んでいる。講演では、宮廷や貴族の諸々の文庫に伝蔵されてきた蔵書群は、前近代の「知識体系（知の体系）」を今日に伝えるものとして読解する必要があるという話をうかがうことができ、得るところ極めて大きかった。

次に、二〇一九年一月一三日に、公開シンポジウム「蓬左文庫本『日次記』をめぐる公家と武家―書物の書写・贈与・相続の新事実―」を実施した（会場：ＪＰタワー名古屋五階　名古屋市立大学サテライト会議室）。このシンポジウムは、蓬左文庫典籍研究会の主催、名古屋市蓬左文庫、名古屋市立大学人間文化研究所、名古屋市立大学都市政策研究センターの共催で開催された。プログラムは、以下の通りである。

挨拶　　吉田一彦、鳥居和之
「蓬左文庫本『日次記』の写本系統」　　廣瀬憲雄
「蓬左文庫本『日次記』の所在と変遷」　　木村慎平
「『日次記』と二条家」　　手嶋大侑
コメント　　松薗斉
全体討論

このシンポジウムでは、ここ一年間ほどにわたって集中的に調査、研究を進めてきた『日次記』について、研究会構成員が中間報告を行なった。その後、コメンテイターにお招きした松薗斉氏（愛知学院大学教授）より日記研究の視座からの深く示唆的なコメントを頂き、さらにフロアーを交えて長時間におよぶ全体討論を行なった。私たちは、ここで、「書物と権力」という視座から、『日次記』写本の系統、徳川光国書状（徳

写真３　公開講演会ポスター

写真４　公開シンポジウムポスター

川光友宛）・土井利房書状（中山備前守宛）の意味と価値、本奥書の読解、蓬左文庫本『日次記』に記される「足利義満安堵状写」「後小松天皇勅書写」の意味と価値などについて、調査の成果を発表した（その詳細は研究会構成員により、論文として発表する予定である）。

この日は多くの一般の来聴者の方々とともに、地元愛知をはじめ、東京や関西からも専門の研究者が多数参加してくださり、全体討論の場でいくつもの重要な意見を頂くことができた。それらの多くは研究を前に進めるのに役立つ貴重な情報の提示であり、特に慶應義塾大学図書館に『日次記』が所蔵されているとの発言には場内がどよめき、私たちは悦び、感激した。このシンポジウムで頂戴した意見を受けて、さらなる研究の深化を目指したい。ご来場いただいた方々に心より御礼申し上げる次第である。

写真５　公開シンポジウム風景

［参考文献］
手嶋大侑　「蓬左文庫典籍研究会の発足」『蓬左』九五、二〇一七年
廣瀬憲雄　「蓬左文庫典籍研究会の活動」『蓬左』九六、二〇一八年